

〔個人研究〕

## 『維摩經』と「無尽灯の法門」

西 野 翠

## はじめに

『維摩經』(*Vimalakīrtinirdeśa*)「菩薩品第四」(第3章 声聞と菩薩を病氣見舞いに遣わす)において、魔王パーピーヤス(*pāpīyas*: 波旬)が引き連れてやって来た天女たち(*apsaras*)に対し、ヴィマラキールティ(*Vimalakīrti*: 維摩詰、以下維摩)が説いた教えが「無尽灯という名の法門」(*akṣayapradīpaṃ nāma dharmamukha*)である。É. Lamotte は「仏訳維摩經」の注釈において、「この法門は阿含經典(*Tripitaka*)には見出せない<sup>1</sup>」としており、現在一般には、『維摩經』が「無尽灯」の典故とされている。

例えば『織田仏教大辞典』では「無尽灯」について、「法門の名。一人の法を以て百千の人を開導し輾転して尽きざること一燈を以て百燈を燃すに譬えて無尽燈と云う<sup>2</sup>」と説明したあと、『維摩經』「菩薩品」の該当個所が引用されている。また『仏教大辞彙』でも、「一個の燈火と雖もこれを移して無数の燈火となすことを得るを云う。維摩經卷二(菩薩品)に之を説き…<sup>3</sup>」と、同じ個所が引用されている。『岩波仏教辞典』は、最初に「維摩經菩薩品に説かれ」と『維摩經』との関連を挙げたうえで、「すなわち1人の者が法をもつて多数の衆生を開導すれば、また多数の衆生が多数の者を開導し、展転して尽きないことから、あたかも1個の灯が次々に移されて無数の灯となることに譬えていう。菩薩の化導の義として説かれる<sup>4</sup>」と内容を説明している。また宇井博士の『仏教辞典』には、「仏の法門。一人の法を以て百千の人を開導し、展転して尽きざるを、一燈を以て百燈を燃すに喩えていう。維摩經に説かる<sup>5</sup>」とある。

以上のように、今日、「無尽灯」ないし「無尽灯の法門」の典故は『維摩經』

(170)

と考えられている。本稿では、その「無尽灯の法門」が『維摩経』のどのような場面で説かれ、如何なる教えを内容としているかを中心に、灯明そのものの大乘仏教における意味についても考えてみたい。

## 1. 「無尽灯の法門」の起こり

最初に、「無尽灯の法門」の典故とされる『維摩経』の該当箇所をみておきたい。

病気を装い臥せっている維摩の見舞いに派遣しようと、世尊（釈迦牟尼：Śakyamuni）は主だった弟子たち<sup>6</sup>に声をかける。しかし、いずれも維摩にやり込められた経験を語り、「わたしはかの貴いお方の病氣見舞いに行くことはできません<sup>7</sup>」と固辞する。そこで世尊は菩薩たちに向き直り、最初に弥勒菩薩（Maitreya）、つづいて光嚴童子（Prabhāvyūha）に声をかけるが、やはり辞退する。次に持世菩薩（Jagatindhara<sup>8</sup>）の番になったが、彼も同じく過去の因縁を語り辞退する（III-62～67：第3章62～67節の意、以下同じ）。その因縁話に「無尽灯の法門」が出てくる。

### 1-1 持世菩薩の因縁話

自分の家にいた持世菩薩のところに、魔王パーピーヤス<sup>9</sup>が一万二千人の天女を引き連れ、シャクラ<sup>10</sup>（Śakra：帝釈）の姿をとってやって来る（III-62）。持世菩薩はそれを見破ることができず、帝釈が善法を求めに来たと思い込み、「五欲に放縱であってはならない。五欲の無常をよく観察し、身命財等の堅固ではない法は捨てて堅固なもの（無常の法）を獲得しなさい<sup>11</sup>」と説く（III-62）。偽の帝釈は好意に感謝するふりをして、持世菩薩に天女たちを受け取って侍女とするように勧める。しかし、持世菩薩は「釈子である自分にふさわしくないから」と断った。

そこに維摩がやって来て、持世菩薩に「これは帝釈ではない。魔王が化けて現れ、菩薩の修行を擾乱しているのだ<sup>12</sup>」と気づかせ、そこから魔王と維摩の論戦が始まる（III-63）。その結果、魔王は天女たちを維摩に与えざるを

えなくなる。そこで、維摩は天女たちに無上正等菩提 (*anuttarāyāṃ samyaksaṃbodhi*) に心を発すことを勧め<sup>13</sup>、「五欲の喜び (*kāmarati*) ではなく法の樂園の喜び (*dharmārāmarati*)<sup>14</sup>を喜びなさい」と教える (III-64)。

天女たちが発心し、法の樂園の喜びを喜ぶようになったところに、魔王が戻って来て、天女たちに自分と一緒に魔宮に帰るように命ずる (III-65)。しかし、天女たちは彼の命令に従おうとはしなかった。そこで魔王は維摩に対し、「あなたは菩薩摩訶薩なのだから全財産を放棄すべきだ」と主張し、天女たちを還すようにと迫る (III-65)。維摩はその求めに応じ、天女たちに魔王と一緒に帰るように勧め、魔宮での過ごし方を教える。その教えが「無尽灯の法門」である。

## 1-2 「無尽灯の法門」の教え — 維摩の願

魔王に天女の返還を求められたとき、維摩は「それはもうお返ししました。パーピーヤスよ、行きなさい。一切衆生に対し、法に適った願いを満たしてあげなさい<sup>15</sup>」 (III-65) と答える。三漢訳は以下の如くである。

支謙：我已捨矣。汝便將去。使一切人遵承法行所願皆得。

(我れ已に捨てぬ。汝、便ち將いて去れ。一切人をして法行を遵承し、所願皆な得せ使めよ。)

羅什：我已捨矣。汝便將去。令一切衆生得法願具足。

(我れ已に捨てぬ。汝、便ち將いて去れ。一切衆生をして法願具足するを得せ令めよ。)

玄奘：吾以捨矣汝可將去。當令汝等一切有情法願滿足。

(吾れ以て捨てぬ。汝、將いて去る可し。當に汝等一切の有情の法願を満足せ令むべし。)

この一文に、羅什は以下のように注を付している。

什曰く。居士は女を以て魔に還せば、則ち魔の願具足す。故に因って願を発し、衆生をして法願の具足するを得せ令む。此れ維摩詰の願なり。(大正 38・367b)

維摩が魔王に天女たちを還したことで魔王の願は満たされた。そこで維摩は、五欲の喜びから法の喜びに目覚めた天女たちが魔宮に戻って法を弘めることを願ったというのである。「無尽灯の法門」は天女たちに託された「維摩の願」と理解されている。維摩は天女たちに次のように説く。

「天女たちよ (*bhaginyah*)、〈無尽灯という法門〉があります。あなた方はそれを行じなさい。…… 一つの灯から百千の灯が点火されても、その灯の滅があるわけではありません。それと同様に、天女たちよ、一人の菩薩が多くの百千の衆生を菩提に安住させても、その菩薩の心の憶念<sup>16</sup>は減らないし、減らないだけでなく、むしろ増大するのです。そのように、[ある一人の人が] あらゆる善法を他の人々に対して宣言し、説示するに依じて、あらゆる善法も [さらに] 増大するのです。これこそが無尽灯という法門です」(III-66)

初行の菩薩<sup>17</sup>である天女に向かって語られているだけに、「無尽灯の法門」は「入不二法門品第九」(第8章 不二の法門に入る)で説かれる「不二の法門」(*advaya dharmamukha*) などと違い非常に分かりやすい内容になっている。

ちなみに、ここにおける維摩の天女たちへの呼びかけ '*bhaginyah*' (単数形は *bhagī* = a sister) は相手に対する親しみが込められたもので、Lamotte の仏訳では '*Mes sœurs*' (*My sisters*) となっている。維摩の天女に対する親愛の情が読み取れるのではないだろうか。三漢訳は「諸姉」、チベット訳は '*sring mo dag*' (*Sisters*) でサンスクリットが直訳された形である。

### 1-3 「無尽灯の法門」の諸訳比較と内容確認

「無尽灯の法門」のサンスクリットは先に示した如く *akṣaya pradīpaṃ nāma dharmamukha* だが、その法門に関する維摩の説法の諸訳は以下の如くである(チベットは長尾訳)。

支謙：譬如一燈燃百千燈。冥者皆明。明終不盡。如是諸姉。夫一菩薩以道開導百千菩薩。其道意者終不盡耗而復增益。於是功德不以導彼

彼故而有盡耗。是故名曰無盡常開法門。(譬えば、一燈の百千燈を燃すが如し。冥き者、皆な明なり。明、終に尽きず。是の如く諸姉よ、夫れ一りの菩薩、道を以て百千の菩薩を開導するに、其の道意は、終に尽耗せずして、而も復た増益す。是の功德に於て、以て彼彼を導く故に、而も尽耗有らず。是の故に、名づけて無尽常開法門と曰う。)

羅什：譬如一燈燃百千燈。冥者皆明。明終不盡。如是諸姉。夫一菩薩開導百千衆生。令發阿耨多羅三藐三菩提心。於其道意亦不減盡。隨所說法而自增益一切善法。是名無盡燈也。(譬えば、一燈の百千燈を燃すが如し。冥き者、皆な明なり。明、終に尽きず。是の如く諸姉よ、夫れ一りの菩薩、百千の衆生を開導し、阿耨多羅三藐三菩提心を發さ令む。其の道意に於て亦た減尽せず。所説の法に随つて而も自ら一切の善法を増益す。是を無尽燈と名づくるなり。)

玄奘：諸姉。譬如一燈然百千燈。暝者皆明明終不盡亦無退減。如是諸姉。夫一菩薩勸發建立百千俱胝那庾多衆。趣求無上正等菩提。而此菩薩菩提之心。終無有盡亦無退減轉更增益。如是爲他方便善巧宣說正法。於諸善法轉更增長。終無有盡亦無退減。諸姉當知。此妙法門名無盡燈汝等當學。(諸姉よ、譬えば、一燈の百千燈を燃すが如し。暝き者、皆な明なり。明、終に尽きず、亦た退減せず。是の如く諸姉よ、夫れ一りの菩薩は、百千俱胝那庾多の衆を勸發建立して、無上正等菩提に趣求し、而も此の菩薩の菩提の心は、終に尽有ること無く、亦た退減なく、転た更に増益す。是の如く他の爲に方便善巧し、正法を宣説し、諸の善法に於て、転た更に増長し、終に尽有ること無く、亦た退減無し。諸姉よ、当に知るべし、此の妙法門を無尽燈と名づく。汝等、当に學ぶべし。)

藏文：一つのともしびから百・千のともしびが点火されても、かのともしび（の明るさ）が減るわけではありません。それと同じく、ひとりの菩薩が百・千の多数の人々を菩薩のなかに導き入れても、かの菩薩の（菩提の）心に対する記憶は減らないし、減らないだけでなく増加するものです。同様に、あらゆる善の法も他に対して説かれたとき、説かれるに依じて、それらの善はすべて増大する。これが無尽燈と名づけられる法門です。

諸訳で若干ニュアンスに違いはあるものの、無尽灯という法門の内容自体の理解に違いはなく、以下の三点が要として挙げられる。

- 1) 一灯から百千の灯に点じられても、元の一灯の明るさは減じない。
- 2) 一菩薩が百千の菩薩を教導しても、元の菩薩の菩提心は減ずることなく寧ろ増大する。
- 3) [善] 法は説かれるにしたがって、増大し尽きることがない。

魔宮に還る天女たちへの餞別として語られたこの法門には、弘法宣揚の希望的側面が描写されており、初行の菩薩である天女たちの菩提心を燃え立たせる激励となっている。

## 2. 「無尽灯の法門」の実践と功德

維摩は天女たちに上記の如く「無尽灯の法門」を説き示し、それ実践するならば「如来の恩に報いること」になり、「一切衆生を利益すること」にもなると教えている。ここでも諸訳の比較によって内容を確認したい。

支謙：魔界無數天子玉女。未有可此道意如汝等者。於如來爲有返復法。  
爲一切人。

(魔界の無数の天子・玉女、未だ此の道意の汝等の如き者にして、如来に於て返復の法有りと爲し、一切の人の爲になす可くは有らず。) \*サンスクリット原文に照らして読み下しを試みた。

羅什：令無數天子天女發阿耨多羅三藐三菩提心者。爲報佛恩<sup>18</sup>。亦大饒益一切衆生。

(無数の天子・天女をして阿耨多羅三藐三菩提心を発さしむれば、仏恩を報じ、亦た大いに一切衆生を饒益すと爲す。)

玄奘：雖住魔宮當勸無量天子天女發菩提心。汝等即名知如來恩眞實酬報。亦是饒益一切有情。

(魔宮に住すと雖も、当に無量の天子・天女に勧めて菩提心を発さしむべし。汝等、即ち如来の恩を知り眞實、酬報し、亦た是れ一切有情を饒益す。)

梵文：tatra yuḥmābhir mārābhavane sthitābhir aparimāṇānām  
devaputrāṇām apsarasām ca bodhicittam rocayitavyam / evaṃ  
yūyam tathāgatasya kṛtajñā bhaviṣyatha / sarvasattvānām  
côpajīvyā bhaviṣyatha / (そこで、あなた方は魔宮にとどまって、無量  
の天子たちや天女たちに菩提心を願い求めさせなさい。そのようにして、あな  
た方は如来の恩に報いて、一切の衆生たちを饒益しなさい。)

蔵文：bdud kyi gnas de na khyod gnas p'i tshe lha'i bu dang. lha'i  
bumo tshad ma rnams byang chub kyi sems la mos par kyis  
shig. de ltar na khyed de bzhin gshegs pa la byas pa gzo  
bar 'gyur ro. sems can thams cad kyi 'tsho bar yang 'gyur  
ro. (おまえたちがかの魔宮に帰ったなら、無量の天子や天女たちが菩提の心  
を願うようにしなさい。そのようにしておまえたちは、如来の恩をよく知る者  
となり、あらゆる衆生を(真に)生かすことともなるでしょう。)

「如来の恩」に当たるサンスクリット *tathāgatasya kṛtajñā*<sup>19</sup> の文字どおりの意味は「如来にしてもらったことを知る、心に留める」であり、チベット訳 *de bzhin gshegs pa la byas pa gzo ba* も同じく、「如来に対して、してもらったことを心に留める＝深く感謝する、報謝する」の意である。「チベット訳維摩經」を英訳した Robert A.F. Thurman はこの語を '*the kindness of the Tathāgata*' (如来のやさしさ) と訳し *kindness* に注して以下のように述べている。

'Tib. *drin gzo ba, or byas pa gzo ba* ; Skr. *kṛtajñāḥ*. This is one of the important themes of the meditation of the spirit of enlightenment, of love and compassion. The kind deeds of the Thatagata consist in his appearance in the world in order to save living beings, as a kind mother will even sacrifice her life for her beloved child. This kindness is repaid by generating the same compassion for all other living beings and conceiving the spirit of enlightenment.' (Thurman[2001], p.121, note 27)

(拙訳：これは覺りと、愛と慈悲の精神の瞑想の重要なテーマの一つである。如来のやさし

い行為とは衆生を救わんとして世に現われたことである。それはちょうどやさしい母が愛する子どものために自分の命さえ犠牲にするようなものである。このやさしさは他のすべての人々が同じ慈悲心を生み、覚りの精神を獲得することで報われる。

Thurman の表現を借りるなら、「如来の恩」とは「衆生済度のために仏がこの世界に出現したこと」であり、それは一人子に対する親の慈愛にも喩えられる<sup>20</sup>。その慈愛を受けた者がその恩を感じ<sup>21</sup>、自分が受けた慈愛を他者に巡らすとき、如来の恩に報いること（返礼）になると理解できる。

無尽灯の法門についての僧肇の注釈には、「自ら行じ彼を化せば、則ち功德いよいよ増して、法光の絶えざるを無尽灯と名づくるなり」（大正 38・367b）とある。これによれば、「如来の恩」を感じた者がまず自ら行じ、他者を化度し、それによって功德が増し加わり、不断に法の光が放たれる（無尽灯）。ここでは行じる内容については明らかにされていないが、『維摩経』における戒および行については稿を改めて検討したい。

### 3. 「無尽灯の法門」に関する文献

Lamotte が「無尽灯」についての注釈（脚注 1 を参照）で挙げている H.Durt の chōmyōtō の記事<sup>22</sup>を見てみよう。Durt は長明灯に関連した様々な供養について『法華経』の「薬王菩薩本事品」の例<sup>23</sup>などを挙げて説明したあと、「長く消えない灯を供養することをテーマとする現存テキストによれば、その淵源はインド仏教にあるのではないかと推測される」（Durt [1967], p.361）として、インド仏教における「長く消えない灯（無尽灯）」について述べている。Durt によると、無尽灯に関する文献（テキスト）は以下の三種に分類できる。

- 1) いつまでも消えない灯明を供えることによって得られる功德を賛美するもの。

(Les éloges de mérites obtenus par l'offrande de lampes de longue durée.)

- 2) 貧しい女によって捧げられた灯とそれに続く奇跡の逸話。唯一その灯明だけが燃え続け、お偉方の供えた灯明は消えてしまう<sup>24</sup>。



(Le récit de l'offrande d'une lampe par une femme pauvre et du prodige qui s'ensuit: seule, cette lampe se maintient allumée, alors que les lampes offertes par les puissants s'éteignent.)

- 3) 消えない灯の寓話。自らの輝きを少しも失わずにその炎を他の灯明に伝える不滅の奉灯の寓話。無尽灯の起源である。

(L'allégorie de la lampe impérissable qui, sans rien perdre de son éclat, communiqué sa flame à d'autres lampes. origine de *mujintô*.)

三番目のグループの起源に『維摩經』の「無尽灯の法門」が当たるのであるが、Durt は「この有名な寓話は独立した大乘テキストとして存在していた可能性のある一法門(“Rubrique de la Loi”, 法門, Sk. *dharma-paryāya*)から借りてきたようである」との推測を示している。その大乘テキストの候補として考えられているのが *Avataṃsaka* (華嚴經) である。『華嚴經』は『維摩經』に付された副題 *Acintyavimokṣa* と同様の *Acintyasūtra* あるいは *Acintyavimokṣasūtra* という副題もち、両經の関係の深さは Lamotte によって指摘されている<sup>25</sup>。

『大方広仏華嚴經』(八十卷; T279, 大正 10・432c1-4) および『大方広仏華嚴經』(四十卷; T293, 大正 10・828b15-17) に、『維摩經』と同主旨の寓話がまったく同じ形で見出される。

善男子。譬如一燈然百千燈。其本一燈無減無盡。菩薩摩訶薩菩提心燈。

亦復如是。普然三世諸佛智燈。而其心燈無減無盡。(T279, 432c1-4)

善男子。譬如一燈然百千燈。其本一燈。無減無盡。菩薩摩訶薩菩提心燈。

亦復如是。

普然三世諸佛智燈。而其心燈無減無盡。(T293, 828b15-17)

また、短縮された形ではあるが、六十巻本にも同主旨の寓話が見られる。

譬如一燈然百千燈無所損減。菩提心燈亦復如是。悉然三世諸佛慧燈。無所損減。(T278, 778b21-23)

なお、四十巻本ではほかの個所でも「無尽灯」という名称が使われている

(178)

が、Durt の指摘どおり、それは Sk. *āloka* に相当するにすぎない<sup>26</sup>。参考までに経文を挙げる。

菩薩云何修菩薩行。生如来家。爲無盡燈。光明照世。盡未來劫。難行能行。而無厭倦。時善財童子。頭面禮敬彼夜神足。(T293, 777c13-15)

#### 4. 仏典にみる「灯明」の意味

「四分律第五十」や「摩訶僧祇律」(第三十五)には、僧院で必要な生活用具としての灯の「装置並びに燃燈の法」が詳しく述べられていて興味深い<sup>27</sup>。また、仏塔・仏像および経巻などの前に灯を点すことで大きな功德が得られるとして、それを讃嘆した經典も非常に多い。例えば『増一阿含經』(卷第三十八)には、「燈光如来が過去世に長老比丘であったとき、灯火の麻油を日日宝蔵如来に供養したことによって、成仏の授記を得た<sup>28</sup>」との記述がみられる。また『施燈功德經』では、「仏法僧を信じて福田にわずかばかりの燈明を奉施するだけで、その功德は無量にして、ただ仏のみそれを知る<sup>29</sup>」といわれており、『仏为首迦長者説業報差別經』には「燈明奉施の十種の功德<sup>30</sup>」が挙げられている。

また、「灯明」が法や智慧などを象徴している例として、『華嚴經』「第七十八法界品」の「善財は法燈を然<sup>とも</sup>すに信を炷とし、慈悲を油とし、念を器とし、功德を光として、三毒の暗を滅除す」(T279, 426b4~5) などがある<sup>31</sup>。ちなみに、後世においては「法脈」を呼んで「法灯」となし、これを伝えるのを「伝灯」、これを継ぐのを「続灯」、永く絶えないのを「無尽灯」とも「長命灯」ともいう<sup>32</sup>。

#### 5. 天女に託された弘法 — 『維摩經』の女性観

なお金子 [1947] は、この「無尽灯の法門」は大乗の「女性観」を理解するうえで重要であると指摘している。

これは明らかに女性に弘法の任を負わせたのである。随って此の經意には、女性こそ大乘法を伝える器となるものであるということがなくてはならぬ。勿論、大法の宣伝は菩薩大士の業に違いはない。けれども菩薩大士だけでは届き兼ねるものがある。それを補けて法を浸潤せしむるのは女性の信者である。というような意味が無くては、無尽燈の説がどうして天女に対して為されたかということが解らぬことになる<sup>33</sup>。

「古来の注釈でこの点に着眼したものが無いのは甚だ不思議なこと」として、金子はこのあと「大乘仏教の女性観」についての見解を『法華經』や『勝鬘經』、『觀無量壽經』を引いて展開している。その結論からすると、『維摩經』の女性観がかなり画期的なものであったことが窺える。

持世菩薩の縁に依りて知らんとせる「女性観」は（中略）女人を修道の妨げとする小乗教のものではないのみならず、単に女人とて男子には劣らぬというだけのものでないようである。随って斯かる意味を有つことに於て、女人はまた男子修道の善友ともなり得るものであらねばならぬ<sup>34</sup>。

従来、仏教における女性観については主として女性差別の視点から論じられることが多かったように思われる。しかし不二を説く『維摩經』では、男女の差別はむしろ否定され、男女の差別にこだわる非が諫められている。例えば「觀衆生品第七」では、かの舍利弗が維摩の家に住んでいた天女に散々にやり込められ、男女の性が転換される一幕もみられる（VI・7～15）。「舍利弗への勝利宣言」ともいえる天女の以下の科白に、『維摩經』の男女観が明瞭に表わされているといえよう。

あらゆる女の女身も、女でないのに女身として現れているのです。このことを密かに意図して、世尊は〈あらゆる存在は女でもなく男でもない〉と仰せになったのです。（VI・15）

『維摩經』は「一切皆空」の立場から、当時の慣習を打ち破るラディカルな旗幟を掲げていたとみられる。女性観についてばかりでなく、出家・在家

の別についてもそれまでとは異なった見方を示しており<sup>35</sup>、そうしたところにも初期大乘仏教の遷移の一面が映し出されているといえないだろうか。

## 6. おわりに

『維摩経』における「無尽灯の法門」は、一菩薩の道心がやがて浄土の完成につながるという点から、「仏国土建設の道程」を示すものとしても重要である。熟達した菩薩たちを相手に説かれた「不二の法門」と比べて理解しやすい「無尽灯の法門」が初行の菩薩である天女たちに対して語られているところに、維摩の願成就への深い思いを読み取ることができる。蛇足ながら、「不二の法門」からすれば「明暗も二にして一」であるはずであり、維摩が見詰めていたのは光と闇が分かれる前の本源的な光であったにちがいない。

また、灯が放つ光は闇とは共存せず、いかに小さな光であっても、点された途端、闇は瞬時に駆逐される。例えば『大方広仏華嚴経』に、「譬如一燈入於闇室。百千年闇悉能破盡」(T279, 432c4-5)、「譬如一燈入於闇室。百千年闇悉能破盡。發起光明。普照一切」(T293, 828b18-19)、あるいは「譬如明燈入大闇室。悉能照除一切闇冥」(T278, 778b23-24)とあるとおりである。

『維摩経』の「見阿閼仏品第十二」(第11章 アピラティ世界の示現とアクション・ブヤ如来)には、光と闇に関する維摩と舎利弗の対話がみられる(XI-3)。\*( )内は羅什訳。

[維摩]「日光は闇とともにいられるものでしょうか(日光出づる時、冥と合するや。)

[舎利弗]「それはありません。両者が同伴することはありません。なぜなら、日輪が昇るとすぐに、闇は消滅するからです」(不なり。日光出づる時は、即ち衆冥無し。)

[維摩]「では、どうして太陽は閻浮提に昇るのですか」(夫の日、何が故ぞ閻浮提を行ずるや。)

[舎利弗]「まさに照らすためであり、また闇を駆逐するためです」(明照

を以て之が為に冥を除かんと欲す。)

[維摩]「まさにそのように、菩薩たちは衆生たちを清浄にするために、わざわざ不浄な仏国土に生まれるのです。また、煩惱とともにあるのではなく、一切衆生の煩惱の闇を消滅させるのです」(菩薩も是の如し。不浄の仏土に生ずと雖も、衆生を化せんが為なり。故に、愚闇と而も共合するにはあらざるなり。但だ、衆生の煩惱の闇を滅するのみ。)

衆生を清浄にするために不浄な国土(娑婆世界)に來生した維摩は、アクションブヤ(Akṣobhya: 無動<sup>36</sup>)如來のアビラティ(Abhirati: 妙喜)世界から送られてきた一つの灯明とみることができる。維摩が世尊の求めに応じて大集会の前にアビラティ世界を出現させると、それを見た「十四万アユタの天や人の生類たちがそ無上正等菩提に心を起こし」、また「すべての者たちはアビラティ世界に生まれたいと誓願を立てた」と記されている(XI-7)。このように衆生を済度に導く維摩は無動如來の恩に報いていることになるのではないだろうか。そして、維摩の説示に心動かされて「自ら行じ他を化する」道を歩む者がいるとすれば、經典それ自体が如來の恩に報いるもの、すなわち「無尽燈」といえるのではないだろうか。

(以上)

(綜合仏教研究所研究員)

#### 《参考文献》

- 『対訳 注維摩詰經』[2000] 大正大学綜合佛教研究所 注維摩詰經研究会編、大正大学綜合佛教研究所
- 『梵文維摩經 — ポタラ宮所蔵寫本に基づく校訂—』[2006] 大正大学綜合佛教研究所 梵語佛典研究会編、大正大学出版会
- 『法寶義林 HÔBÔGIRIN』[1967] L'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres Institut de France avec le Concours de L'Académie du Japon
- 王家軒 [2014] 「無盡燈法門 — 心燈傳照, 光光無盡」(『美佛慧訊』149期) 美國佛教會, New York (<http://www.bauswj.org/wp/wjonline/> 無盡燈法門—心燈傳照光光無盡/ 最終アクセス日: 2016年5月23日)

大鹿實秋 [1988]『維摩經の研究』平樂寺書店

金子大栄 [1947]『弟子の智慧』全人社 (1948年再版)

高橋尚夫／西野翠訳 [2011]『梵文和訳 維摩經』春秋社 (2013年2刷)

高橋尚夫監修・西野翠訳 [2015]『ラモットの維摩經入門』春秋社

Lamotte, Étienne [1976] *The Teaching of Vimalakīrti*, rendered into English by Sara Boin-Webb, PTS, London (The original French version appeared as Volume 51 in the collection Bibliothèque du *Muséon*, Louvain, 1962.

Thurman, Robert A.F. [2001] *The Holy Teaching of Vimalakīrti*, The Pennsylvania State University Press, University Park, Pennsylvania (First published 1976)

- <sup>1</sup> 参照：Lamotte [1976] p.105, fn.134. [拙訳] ここで維摩は *Akṣayapradīpa* という題のテキスト(チベットは *chos kyi sgo*；漢訳は法門)に触れている。筆者はそれを *Tripitaka* の目録の中に見いだすことはできないが、そこに出てくる短い引用は Ovid の *Ars amatoria*, III, 90-93 の一節を想い出させる。

*Quis vetet adposito lumen de lumine sumi?*

*Mille licet sumant, deperit inde nihil.*

消えることのない灯の寓意については、H.Durt の *chōmyōtō* の記事 (Hōbōgin, IV, p.363) を参照。

なお、Lamotte が引用している Ovid の詩の一節を樋口勝彦訳『恋の技法』(平凡社ライブラリー97、平凡社、1995年)を参照にその意味を取ると、以下の如くだろう。

『目の前に』置かれた灯から明かりを取ってはならぬという者があるだろうか？

千人と『喜びを』共にしようとも、そのために失うものは何もない。

- <sup>2</sup> 『織田仏教大辞典』(大蔵出版、1945年再刊発行、2005年新装1刷)、1709-1710頁。
- <sup>3</sup> 『佛教大辞彙 (第6巻)』(龍谷大学編、富山房、大正11年初版、昭和15年三版)、4345頁。
- <sup>4</sup> 『岩波仏教辞典』(中村元等編、岩波書店、1989年)、787頁。
- <sup>5</sup> 『佛教辞典』(宇井伯壽監修、大東出版、1965年重版)、1040頁。
- <sup>6</sup> いわゆる「十大弟子」で、『維摩經』における登場順に挙げると舍利弗 (Śāriputra)、大目犍連 (Mahāmaudgalyāyana)、大迦葉 (Mahākāśyapa)、須菩提 (Subhūti)、富樓那 (Pūrṇa)、迦旃延 (Kātyāyana)、阿那律 (Aniruddha)、優波離 (Upālī)、羅睺羅 (Rāhula)、阿難 (Ānanda) の十人である。
- <sup>7</sup> *nāham utsahe tasya kulaputrasya glānaparipṛchako gantum* / (『梵文維摩經』21頁など) 和訳は高橋・西野 [2011] による。以下すべて同じ。
- <sup>8</sup> チベットは 'gro ba 'dzin、「持世」は鳩摩羅什、玄奘の訳で、支謙は「持人」と訳す。
- <sup>9</sup> 『注維摩詰經』(T1775) において羅什が注を付し、「波旬は秦には殺者と言う。常に人の慧命を断ぜんと欲するが故に殺者と名づく。亦た名づけて悪中の悪と為す。… 若し人の来たりて供養恭敬するに、報恩を念ぜずして、反って之を害す。是れを悪中の悪と名づ

く。悪中の悪は魔王なり。悪の最も甚だしきなり。諸仏、常に衆生をして安隱ならめんと欲す。而るに反って壊乱するが故に、甚と言う」（大正 38・365b）と述べている。また僧肇も、「波旬は秦には言いて或いは殺者と名づけ、或いは極悪と名づく。人の善根を断ずるに因って殺者と名づく。仏に違いて僧を乱す罪、之より大なるは莫きが故に極悪と名づくるなり」（同上）と述べている。Māra については、Lamotte [1976] p.99～100, fn.121 で詳細に解説されている。赤沼智善編『印度佛教固有名詞辞典』（412-415 頁）においては、經典中に見られる Māra の仕業について詳述されている。しかしながら、Lamotte が上掲の脚注で述べているように、『維摩経』では、実際の Māra と同時に偽の Māra がいて、それが慈悲深い菩薩であったりすると説かれている。菩薩は衆生を回心させるために方便を用い、ときには自らを誘惑者に変えるからである。『維摩経』の IV-8 や V-20 にその見方が示されている。

<sup>10</sup> 『注維摩詰経』における羅什の注に、「釈は是れ仏弟子なり。其の疑われざるを知るが故に、釈の形を作して来たる。持世、作意して他心を観ぜざるが故に見えざるなり」（大正 38・365b）とある。ちなみに、Māra が用いる様々な偽装については Mahāsaṃnipāta, p.77,7-79,2 に述べられている。参照：Lamotte [1976] p.101, fn.122.

<sup>11</sup> *apramattena te bhavitavyaṃ sarvakāmaratiṣu, anityapratyavekṣaṇābhulenāttasāreṇa te bhavitavyaṃ kāyajīvitabhogebhyaḥ* / (『梵文維摩経』39頁)

<sup>12</sup> 釈迦牟尼の成道の妨害をしたのも魔王波旬だった。例えば、『悲華経』(T157)に、「我…以是業因縁故今得坐於菩提樹下。欲成阿耨多羅三藐三菩提時。天魔波旬與諸大衆。來至我所欲得壞亂我菩提道」（大正 3・229b16-19）とある。

<sup>13</sup> この一文を羅什は「爾時維摩詰語諸女言魔以汝等与我今汝皆當発阿耨多羅三藐三菩提心」と訳し、それについて、「女人は主に従うを心と為す。魔に属すれば則ち邪教を受け、菩薩に属すれば則ち道化に従う。故に受けて之を誨<sup>おし</sup>う」（大正 38・366b）と注釈している。

<sup>14</sup> サンスクリット文では34項目挙げられる。内容を要約して示すと、「仏に対し揺るぎない浄信を抱き、法を聞くことを願い、僧伽に奉仕し、師を尊敬し仕え、三界から出離し、五欲を離れ、五蘊を死刑執行人と観察し、四大を毒蛇とみなし、六内処を空村と判断し、菩提心を守り、衆生たちを饒益し、布施において分配し、戒を堅く保ち、よく堪え忍び制御し、精進して善を集め、禪定を修め、智慧において煩惱の影現を払拭し、菩提を拡大し、悪魔を降伏し、諸々の煩惱を破壊し、仏国土を浄め、相好完成のためにあらゆる善根を積み、深法を聞いて畏れず、三解脱門を習熟し、涅槃を抛り処とし、菩提道場を莊嚴し、非時に〔涅槃を〕得ず、同類の人に親近し、異類の人々に対し瞋らず迫害せず、善友に親近し、悪友を追い払い、法を歓喜し、方便を用いて〔衆生を〕摂受し、放逸にならずに〔三十七〕菩提分法に親近する」という喜びである。

<sup>15</sup> サンスクリットは *avasṛṣṭā bhavantu / gaccha pāpīyaṃ / sarvasattvānāṃ dhārmikā abhiprāyāḥ paripūryantām* / (『梵文維摩経』41頁)

<sup>16</sup> サンスクリットは *tasya bodhisattvasya cittasmṛti* で、三漢訳は支謙・羅什「其道意、

玄奘「此菩薩菩提之心」とあり、チベットは *byang chub sems dpa' de'i sems dran pa* 「かの菩薩の（菩提の）心に対する記憶」（長尾訳）、「道心」（大鹿訳）とする。

- <sup>17</sup> 『維摩経』の「嘱累品第十四」（第12章 供養の物語と法の委嘱）では、経験の浅い菩薩と熟達した大菩薩との二種の菩薩があると述べている。すなわち、「さまざまな句や文を信受する型」(*vicitrapadavyaṇjanaprasādamudrā* : 初行の菩薩)と「深甚なる法の理趣を恐れず、如実に趣入し悟入する型」(*gambhīradharmanayānuttrāsayaṭhābhūtāvātārapuraveśamudrā* : 長く梵行を行じた菩薩)とである(XII-17)。前者は「深甚なる法を恐れたり軽視したり、あるいはその法の器である菩薩を尊重せず誹謗することによって自らを傷つけ」、また後者は「初行の菩薩を軽蔑したり、深甚なる法を信解しているからと学問を尊重しなかったりすることによって自らを傷つける」と説かれている(XII-18～19)。

- <sup>18</sup> 「報仏恩」（如来の恩に報いる）について、僧肇は「報恩の上なるは弘道より先なるはなし」（大正38・367b）と注している。

- <sup>19</sup> *Monier-Williams Sanskrit-English Dictionary* には ‘*kṛtajña* = acknowledging past services or benefits, mindful of former aid or favours, grateful’ とある。

- <sup>20</sup> 『維摩経』「問疾品」に、「菩薩には一切衆生に対する一人息子への愛情があるのです。彼は衆生の病いによって病む者となり、衆生の病いが癒えることによって病いなき者と[なるのです]」（IV-7）とある。維摩もまた如来と同様、衆生に対して「一人子に対する親の慈愛」をもっている存在である。

- <sup>21</sup> 「[如来の] 恩に報いること」「報恩」について、長尾重輝編『〈大乘莊嚴經論〉和訳と註解 —長尾雅人研究ノート— (4)』（京都：長尾文庫）p.18～19に「資財に対して執着がなく、また戒をやぶることのない者たちは、恩を感じることが身に具わっているから、また（六波羅蜜の）正行を実践しているから、六種の波羅蜜多にこの様に従事している人々なのであって、（助けを受けたのに応じて）菩薩たちに対してその様に返礼をしようとする者たちである。」(XIX-24,25；六趣報恩)との記述があることを高橋尚夫先生（大正大学名誉教授）からご教示いただいた。大乘仏教の流れのなかでの報恩という考え方については今後の考察の課題としたい。

- <sup>22</sup> Hōbōgirin, IV, p.360-365 : 以下 Durt [1967] と表記。

- <sup>23</sup> 「今藥王菩薩是也。其所捨身布施如是。無量百千萬億那由他數。宿王華。若有發心欲得阿耨多羅三藐三菩提者。能燃手指乃至足一指供養佛塔。」(T262, 54a11-14)

- <sup>24</sup> 『賢愚因縁経(貧女難陀品)』（T202, 370c23～371c26 : 漢訳 445 年）、『阿闍世王授決経』（T509, 777a20～b28 : 漢訳 290～306 年）、『根本説一切有部毘奈耶藥事』（T1448, 55c6～56a27 : 漢訳 700～711 年）などの中で説かれている。参照：Durt [1967]（『法寶義林 HÔBÔGIRIN』）361-363 頁。なお、『新約聖書』にも「やもめの献金」（マルコ 12・41-44、ルカ 21・1-4）という同類の説話がみられる。

- <sup>25</sup> Lamotte [1976] 141-143 頁。参照：西野訳 [2015] 20-21 頁。



- <sup>26</sup> サンスクリットは Gaṇḍavyūha, éd. Suzuki et Izumi, p.365,6-7 : Bodhisattvā ...  
katham ālokarā bhavanti lokānām. (Durt [1967] 363～364 頁)
- <sup>27</sup> 参照：『望月佛教大辞典』（第四卷）、3914～3915 頁。
- <sup>28</sup> 「彼長老比丘曰。汝今比丘。勿在餘處乞求。我自相供給。麻油燈炷盡相惠施。是時長老比丘受彼女施。日來取油供養寶藏如來。持此功德福業。施與無上正眞之道。口自演說。年既衰大又復鈍根。無有智慧得行禪法。持此功德之業。所生之處莫墮惡趣。使將來之世值遇聖尊。如今寶藏如來無異。亦遇聖衆如今聖衆而無有異。說法亦當如今無異。是時寶藏如來知彼比丘心中所念。即時便笑口出五色光而告之曰。汝今比丘。將來無數阿僧祇劫。當作佛號曰燈光如來至眞等正覺。」 T125, 757b24～c6)
- <sup>29</sup> 「若復餘人不受戒者。爲樂善故。護己身故。信佛法僧。如是少燈奉施福田。所得果報福德之聚。唯佛能知。」 (T702, 804b6～9)
- <sup>30</sup> 「若有衆生。奉施燈明。得十種功德。一者照世如燈。二者隨所生處。肉眼不壞。三者得於天眼。四者於善惡法。得善智慧。五者除滅大闇。六者得智慧明。七者流轉世間。常不在於黑闇之處。八者具大福報。九者命終生天。十者速證涅槃。是名奉施燈明得十種功德。」 (T80, 895b1～7)
- <sup>31</sup> 参照：『望月佛教大辞典』（第四卷）、3915 頁。
- <sup>32</sup> 参照：同上。
- <sup>33</sup> 金子 [1947] 235 頁。
- <sup>34</sup> 同上 241 頁。
- <sup>35</sup> 「弟子品第三」において維摩は羅睺羅に対して、「功德もなく、利益もないのが出家だからです。… 出家は無為であり、無為においては功德も利益もないのです」(III-39) として出家について23項目を挙げて説いている。
- <sup>36</sup> 「無動」は羅什、玄奘の訳。支謙は「無怒」と訳している。

